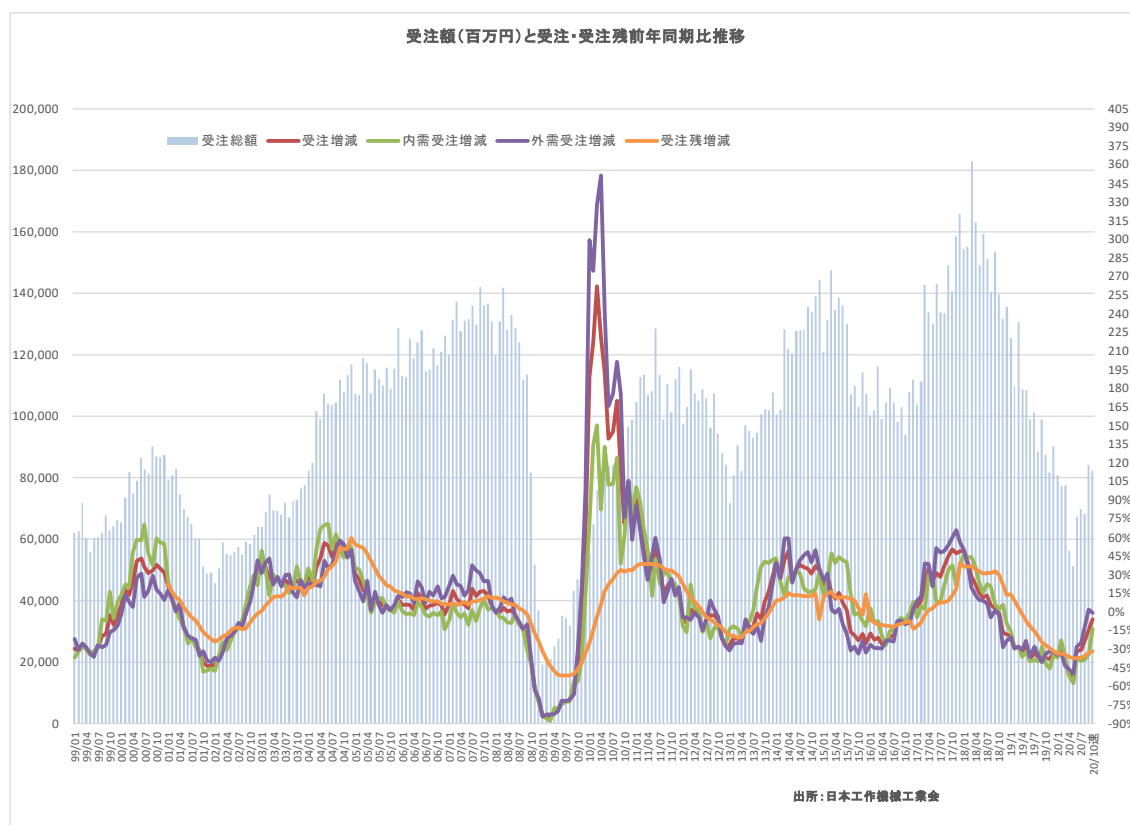


工作機械工業会 10月受注速報 10月は5.9%減と18年10月以来の1桁減に

10月受注は前年同月比5.9%減の823億円と25ヶ月連続減も1桁減は24か月ぶり

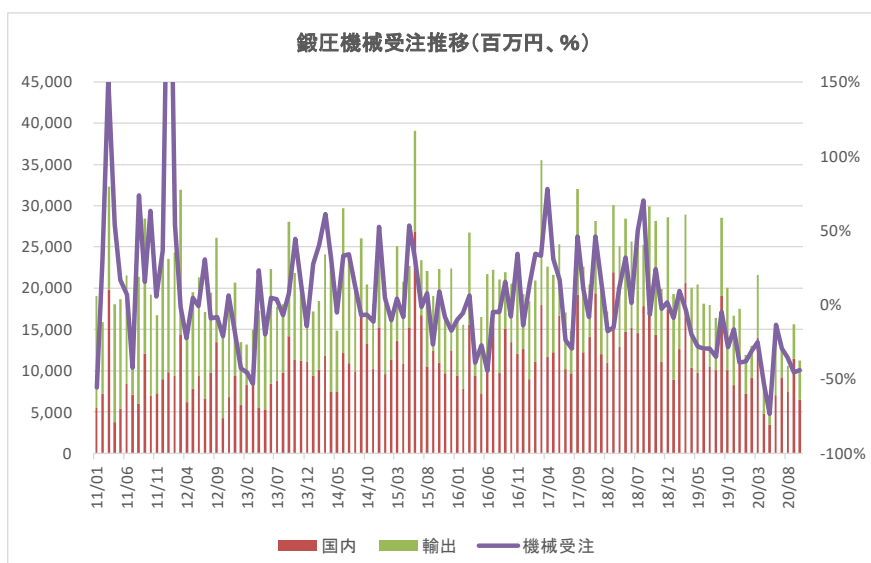
11/11の15時に日本工作機械工業会の10月受注速報が開示された。10月受注は前年同月比5.9%減の823億円と、前年同月比25ヶ月連続減少となった。9月比では2.1%減と、上期末の季節的要素もあり、前月比では減少に。特筆すべきはマイナス幅が18年10月の0.7%減以来、24か月ぶりに1桁となったこと。9月に外需が24ヶ月ぶりにプラスに転じ、減少率の縮小が明らかとなっていたが、内需についても減少率が大幅縮小した。



内訳は内需が289億円(13.6%減)で23ヶ月連続減、前月比では4.6%増。9月に期末要素があり以来の300億円大台乗せたが、再度300億円割れに。外需は534億円(1.1%減)でほぼ横ばいも、2か月連続でプラスとはならなかったが、引き続き中国増が寄与していると思われる。なお2020年10月までの累計では総額7142億円(32.5%減)、内需2655億円(37.4%減)、外需4487億円(29.2%減)、工業会が9/30に減額した年間予想8500億円に対して84%(内需88.5%、外需81.6%)の進捗率となっており、多少、減速感が弱まった感がある。国内は第4次モノづくり補助金、サプライチェーン対策の国内投資促進事業費などで追加措置などもあり、工業会見通しの達成は期待できる。但し、外需は昨今の欧州でのコロナ再拡大などでの影響で、改めて欧米、東南アジアでの投資抑制、投資先延ばしの懸念があり、中国一本足打法ではなかなか厳しい状況にあることは変わっていない。

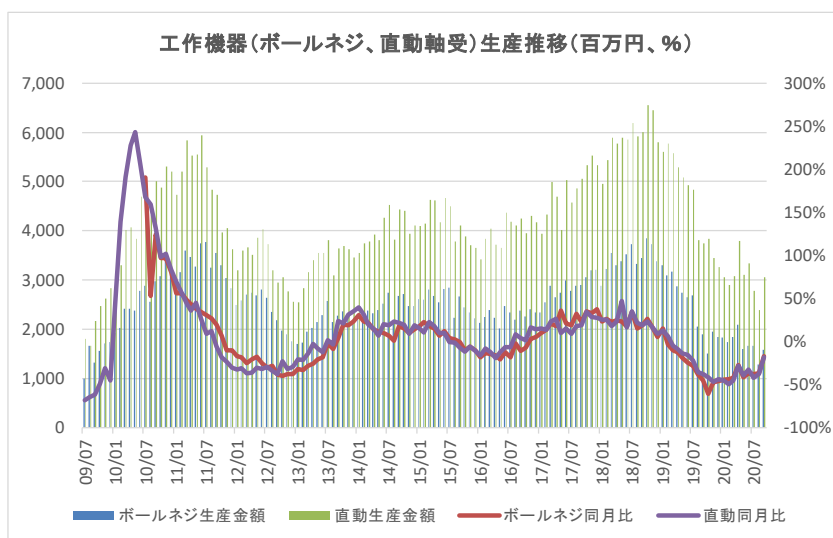
金属加工機械として鍛圧機械受注も低迷、8月受注は前年同月比35.4%減の106.1億円

工作機械と同じ金属加工機械として、鍛圧機械の受注も低迷が続いている。11/9に発表された日本鍛圧機械工業会の10月鍛圧機械受注は、機械全体で前年同月比44.0%減の112億円と20ヶ月連続減と、工作機械以上に厳しい状況が続く。前月比では工作機械同様、上期末比で28.0%減に。10月としては2009年10月の61億円以来の低水準。内訳はプレス機械が62.47億円(53.5%減)、板金機械が49.95億円(24.6%減)。国内が65.27億円(34.9%減)、輸出は47.14億円(53.0%減)と輸出の厳しさが目立つ。内訳は中国が53.0%減も、北米76.3%減、東南アジア46.1%減、欧州は31.7%増(9月は大幅減)も総じて厳しい。



工作機械関連機器の工作機器生産、9月はボールネジ、直線運動軸受とも多少持ち直す

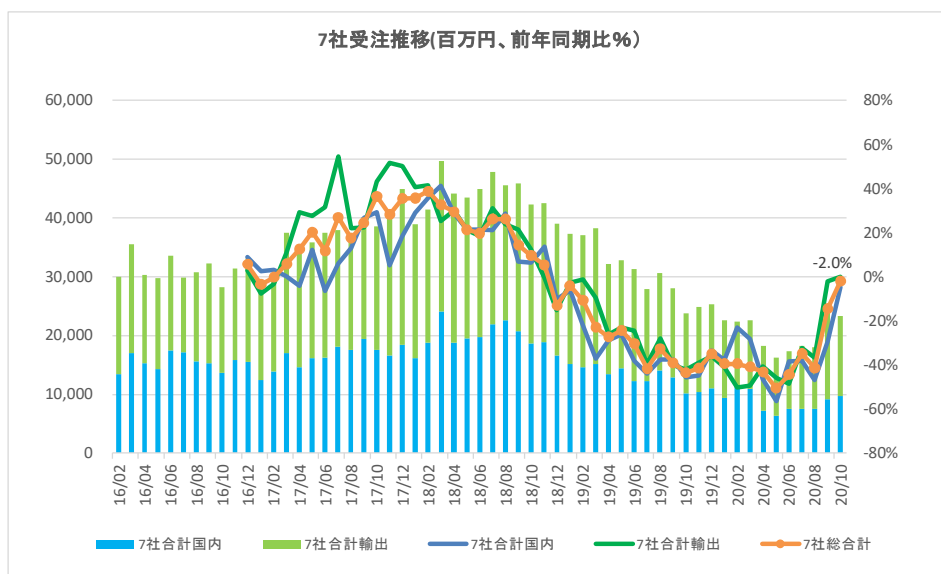
工作機械に関連する工作機器も生産減少が続いている。9月生産では全体で1053億円(27%減)、主力のボールネジが前年同月比17%減の15.9億円、直動軸受も22%減の30.58億円と依然低水準となっている。金額的には昨年秋口の金額をボトムに若干回復傾向にあったが、8月に再度失速、9月は多少戻ったものの工作機械より落ち込みが厳しい。



主要7社の10月受注は2.0%減の233億円と23ヶ月連続減少も工業会より縮小幅小さい

日刊工業新聞がまとめる主要工作機械7社の9月受注実績（11/12発表）は233億円となり、工業会とほぼ同様の動きも、久しぶりに工業会よりも減少幅が少なかった。個別で見ると差が激しく、牧野フライス製作所は26.5%減の38.32億円、オークマ8.6%減の75.53億円、OKK16.0%減の5.46億円、ジェイテクト15.0%減の25.91億円と業界平均を下回る受注に止まる一方、ツガミは22.2%増の52.04億円、芝浦機械65.8%増の21.92億円、三菱重工34.2%増の14.18億円など、7社中3社が前年同月比プラス、いずれも2ヶ月連続で前年同月比増加となった。特にツガミは中国中心に輸出が31.8%増と伸長、中国のウエイトが高いことが大きく寄与し、増額修正も発表している。なお国内外ともプラスとなったのは三菱重工のみ。

日経や日刊工業など先行き楽観的なニュアンスを述べているものの、アマダの説明会では顧客のマインドを探るアマダDIが先行-22、直近-33となっており、先行が現行を上回ったことは下げ止まり傾向があるものの、全体指標が下がっている事は注意を要する。まさに米中摩擦激化や航空機産業の中長期低迷、中国一本足の回復、欧米でのコロナ感染拡大継続など、今後も地勢リスクやコロナなどで変化があれば、再度、下ブレする懸念もあり、予断を許さない状況が続こう。



アマダDI

